星

国木田独歩

都に程（ほど）近き田舎（いなか）に年わかき詩人住みけり。家は小高き丘の麓（ふもと）にありて、その庭は家にふさわしからず広く清き流れ丘の木立（こだ）ちより走り出（い）でてこれを貫き過ぐ。木々は野生（のば）えのままに育ち、春は梅桜乱れ咲き、夏は緑陰深く繁（しげ）りて小川の水も暗く、秋は紅葉（もみじ）の錦（にしき）みごとなり。秋やや老いて凩（こがらし）鳴りそむれば物さびしさ限りなく、冬に入りては木の葉落ち尽くして庭の面（おも）のみ見すかさるる、中にも松杉の類（たぐい）のみは緑に誇る。詩人は朝夕にこの庭を楽しみて暮らしき。

ある年の冬の初め、この庭の主人（あるじ）は一人（ひとり）の老僕と、朝な朝な箒（ははき）執りて落ち葉はき集め、これを流れ岸の

七個所に積み、積みたるままに二十日あまり経(た)ちぬ。霜白く置きそむれば、小川の水の凍るも遠からじと見えたり。かくて日曜日の夕暮れ、詩人外より帰り来たりて、しばしが間庭の中をあなたこなたと歩み、清き声にて歌うは楽しき恋の歌ならめ。この詩人の身うちには年わかき血温(あたた)かく環(めぐ)りて、冬の夜寒(よさむ)も物の数ならず、何事も楽しくかつ悲しく、悲しくかつ楽し、自ら詩作り、自ら歌い、自ら泣きて楽しめり。

この夕は空高く晴れて星の光もひときわ鮮(あざ)やかなればにや、夜(よ)に入りてもややしばらくは流れの潯(ほとり)を逍遙(しょうよう)してありしが、ついに老僕をよびて落ち葉つみ

たる一つへ火を移さしめておのれは内に入りぬ。かくて人々深き眠りに入り夜ふけぬれど、この火のみはよく燃えつ、炎は小川の水にうつり、煙はますぐに立ちのぼりて、杉の叢立（むらだ）つあたりに青煙一抹（せいえんいちまつ）、霧のごとくに重し。

　夜はいよいよふけ、大空と地と次第に相近づけり。星一つ一つ梢（こずえ）に下り、梢の露一つ一つ空に帰らんとす。万籟寂（ばんらいせき）として声なく、ただ詩人が庭の煙のみいよいよ高くのぼれり。

　天に年わかき男星（おぼし）女星（めぼし）ありて、相隔つる遠けれど恋路（こいじ）は千万里も一里とて、このふたりいつしか深き愛

の夢に入り、夜々の楽しき時を地に下りて享（う）け、あるいは高峰（たかみね）の岩角（かど）に、あるいは大海原（おおうなばら）の波の上に、あるいは細渓川（ほそたにかわ）の流れの潯（ほとり）に、つきぬ睦語（むつごと）かたり明かし、東雲（しののめ）の空に驚きては天に帰りぬ。

　女星（めぼし）は早くも詩人が庭より立ち上る煙を見つけ、今宵（こよい）はことのほか寒く、天の河（かわ）にも霜降りたれば、かの煙たつ庭に下（お）りて、たき火かきたてて語りてんというに、男星ほほえみつ、相抱（あいいだ）きて煙たどりて音もなく庭に下（くだ）りぬ。女星の額の玉は紅（くれない）の光を射、男星のは水色の光を放てり。天津乙女（あまつおとめ）は恋の香（か）に酔いて力なく男星の肩に依（よ）れり。かくて二人（ふたり）は一山（ひとやま）の落ち葉燃え尽

くるまで、つきぬ心を語りて黎明（あけがた）近くなりて西の空遠く帰りぬ。その次の夜もまた詩人は積みし落ち葉の一つを燃（や）かしむれば、男星女星もまた空より下（くだ）りて昨夜のごとく語りき。かくて土曜の夜まで、夜々詩人の庭より煙たち、夜ふくれば水色の光と紅の光と相並びてこの庭に下れど、詩人は少しもこれを知ることなし。

七つの落ち葉の山、六（む）つまで焼きて土曜日の夜はただ一つを余しぬ。この一つより立つ煙ほそぼそと天にのぼれば、淡紅色（うすくれない）の霞（かすみ）につつまれて乙女（おとめ）の星先に立ち静かに庭に下れり。詩人が庭のたき火も今夜をかぎりなれば残り惜しく二人は語り、さて帰るさ、庭の

主人（あるじ）に一語の礼なくてあるべからずと、打ち連れて詩人の室（しつ）に入れば、浮世のほかなる尊き顔の色のわかわかしく、罪なき眠りに入れる詩人が寝顔を二人はしばし見とれぬ。枕辺（まくらべ）近く取り乱しあるは国々の詩集なり。その一つ開きしままに置かれ、西詩（せいし）「わが心高原（こうげん）にあり」ちょう詩のところ出（い）でてその中の

『いざさらば雪を戴（いただ）く高峰（たかね）』

なる一句赤き線（すじ）ひかれぬ。乙女の星はこれを見て早くも露の涙うかべ、年わかき君の心のけだかきことよと言い、さて何事か詩人の耳に口寄せて私語（ささや）き、私語（ささや）きおわれば恋人たち相顧みて打ちえみつ、詩人の優しき

頬にかわるがわる接吻して、安けく眠りたまえと言い言い出で去りたり。

あくれば日曜日の朝、詩人は寝ざめの床に昨夜の夢を想い起こしぬ。夢に天津乙女の額に紅の星戴けるが現われて、言葉なく打ち招くままに誘われて丘にのぼれば、乙女は寄りそいて私語くよう、君は恋を望みたもうか、はた自由を願いたもうかと問うに、自由の血は恋、恋の翼は自由なれば、われその一を欠く事を願わずと答う、乙女ほほえみつ、さればまず君に見するものありと遠く西の空を指し、よく眼定めて見たまえと言いすてていずこともなく消え失せたり。詩

人はこの夢を思い起こすや、跳(は)ね起きて東雲(しののめ)の空ようやく白きに、独(ひと)り家を出(い)で丘に登りぬ。西の空うち見やれば二つの小さき星、ひくく地にたれて薄き光を放てり、しばらくして東の空金色(こんじき)に染まり、かの星の光自(おのず)から消えて、地平線の上に現われし連山の影黛(まゆずみ)のごとく峰々に戴く雪の色は夢よりも淡し、詩人が心は恍惚(こうこつ)の境に鎔(と)け、その目には涙あふれぬ。これ壮年の者ならでは知らぬ涙にて、この涙のむ者は地上にて望むもかいなき自由にあこがる。しかるに壮年の人よりこの涙を誘うもののうちにても、天外にそびゆる高峰(たかね)の雪の淡々(あわあわ)しく恋の夢路を俤(おもかげ)に写したらんごと

きに若くものあらじ。

詩人は声はり上げて『わが心高原にあり』をうたい、『いざ去らば雪をいただく高峰』の句に至りて、その声ひときわ高く、その目は遠く連山の方を見やりて恋うるがごとく、憤るがごとく、肩に垂るる黒髪風にゆらぎ昇る旭に全身かがやけば、蒼空をかざして立てる彼が姿はさながら自由の化身とも見えにき。

（二十九年十一月作）

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店
　　１９３９（昭和14）年２月15日第１刷発行
　　１９７２（昭和47）年８月16日第37刷改版発行
　　　２００２（平成14）年４月５日第77刷発行
底本の親本：「武蔵野」民友社
　　１９０１（明治34）年３月
初出：「国民之友」
　　１８９６（明治29）年12月
入力：土屋隆
校正：蒋龍
２００９年３月28日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。